

平成 30 年度 第 3 回研究会 研究演奏発表プログラム

日時 2019 年 3 月 10 日 (日) 13:00~15:00

会場 汐留ベヒシュタイン・サロン(汐留イタリア街)

I. 講演 テーマ：ピアノの響きの考察

C.BECHSTEIN Japan 代表取締役社長

ドイツ・ピアノ製造マイスター 一級ピアノ調律技能士

加藤 正人

II. 会員による研究演奏

1. 町田洋子(日本体育大学) 山西和枝(岩谷学園横浜保育専門学校)
「うみ」林柳波作詞、井上武士作曲
ト長調 (弾き歌い)・変二長調ピアノ独奏 (町田洋子編曲)
「もみじ」高野辰之作詞、岡野貞一作曲
ヘ長調・変イ長調 山西和枝独唱、伴奏編曲 (町田洋子)
「おぼろ月夜」高野辰之作詞、岡野貞一作曲
ハ長調・ニ長調 山西和枝独唱、伴奏編曲 (町田洋子)
2. 長谷川恭子(秋草学園短期大学) 古谷和子(東京経営短期大学) 大海由佳(帝京科学大学)
ふるさと (文部省唱歌 作詞：高野辰之・作曲：岡野貞一・編曲：古谷和子、
大海由佳、長谷川恭子)
ひらいたひらいた (わらべうた 編曲：古谷和子、大海由佳、長谷川恭子)
茶摘み (文部省唱歌 編曲：古谷和子、大海由佳、長谷川恭子)
3. 原久美子 (東京福祉大学短期大学部) 四家昌博 (仙台白百合女子大学)
《こどものための連弾曲集》(中田喜直 編) より
「ゆりかごのうた」、「めだかのがっこう」
《四手連弾のための組曲 日本の四季》(中田喜直 作) より
「5、初秋から秋へ」
4. 大村 新 (貞静学園短期大学)
シューマン作曲《子供の情景》より
〈トロイメライ〉〈炉端にて〉〈木馬の騎士〉
5. 三沢大樹 (常葉大学) 新海 誠 (藤女子大学)
「海四章 海四章 海四章」より 馬車 (三好達治・中田喜直)
木兎 (三好達治・中田喜直)

講演要旨 テーマ：ピアノの響きの考察

C.BECHSTEIN Japan 代表取締役社長
ドイツ・ピアノ製造マイスター 一級ピアノ調律技能士
加藤 正人

ピアノに代わる楽器としてデジタルピアノが利用される場面が今日は少なくありません。デジタルピアノでは気付きが困難な部分、前々世紀・前世紀の音楽家がイメージした響きの立体感や色彩は、音楽を鑑賞・また演奏する上で、大きな感動を得ることができる重要な要素のはずです。

ヨーロッパのピアノメーカーの一つベヒシュタインが、過去の何を残しながら現代に適合させているかを、製造と調律の観点から感じていただければ幸いです。

1 ピアノの響きに求めたい要素

異なった音造りの可能性

- 1- 1 陰影
- 1- 2 抑揚
- 1- 3 重厚⇔繊細
- 1- 4 模糊⇔鮮明

2 レジスター感（音域感）

- 2- 1 フォルテピアノ～ロマン派時代のピアノの響き
- 2- 2 19世紀のピアノの構造とパフォーマンス
- 2- 3 ベヒシュタインの製造の工夫

3 倍音

- 3- 1 倍音を聴く
- 3- 2 調性感と不等分律

1 「今まで知らなかった歌をどのようにして学生に興味を持たせるか」

町田洋子(日本体育大学)

山西和江(岩谷学園横浜保育専門学校)

文部省の指導要領においては必ず歌唱共通教材というものを設定しています。これらの歌が全国どの地域でもみんなが知っている曲になればとても良いことだと思いますが、「初等音楽」の授業をしていて学生が知らない曲が多いことに驚かされています。そしてその曲をどのように弾いたり、歌ったりして覚えていくかを学生と共に考え、毎回の授業で実践してきました。

今まで知らなかった歌(共通教材)をどのようにして学生が歌えるようになるかを、アンケート調査によって訊いてみました。曲目は小学校1年生の共通教材「うみ」、4年生の共通教材「もみじ」、6年生の共通教材「おぼろ月夜」で、アンケートを取りました。

- ① 知らない歌をどのようにしたら早く覚えられるかは、やはり「指導者が簡単な和声コードのある伴奏で弾き歌いをしていく」のが一番わかりやすかったという意見が、80%くらい出ました。「指導者がアカペラで歌ったり、ピアノのメロディーだけを弾く」のは歓迎されませんでした。
- ② 覚えやすさについてアンケートを取りましたが、こちらは「弾き歌いが良い」というのが85%以上でした。以外に複雑なおしゃれなコード、和音とかがついているよりは単純な方がメロディーの邪魔をしないためか「歌いやすい」という結果が出ました。
- ③ 「知らない歌を覚えるのになにが一番効果的ですか」という質問に対して、複数回答を可として訊いたところ、「何回か自分で聴く」というのが40%あって、「何回か自分で歌う」というのが97%以上でした。「興味がわかれば覚える」というのが21%ありました。これは私が時々バックグラウンドミュージックのようにリズムを少し変えたりして弾いた結果ではないかと思えます。「うみ」という曲に関しては、私が授業の初めに「町田洋子です。オーシャンです」と言って、共通教材の「うみ」を弾いたのがとても印象に残ったらしく、興味がわかれば覚えるというのが24%いました。

学生は流行の歌には敏感になってよく覚えるので、「どのようにしたら知らない歌を覚えられるの」という質問を投げかけたところ、まず「ダウンロードしてよく聞く」、次に、「カラオケに行っても何回もひたすら歌う」という私には考えられないような意見が出ました。その後の「楽譜が無いのにどうして歌えるの」という質問に対しては「点数入力すれば音程があっているかどうかを歌いながら見て確認することができますよ」という答えが返ってきました。では、「リズムはどうするの」と訊くと「リズムが違っていれば点数は低く、リズムがあってくれば高くなるのでわかります」といわれ、さらに「楽譜が無くても歌を覚えられますよ。先生もやったら」という声が上がりました。

学生に対して「皆さんが教員になった時に新しい曲をどのように教えていきますか」という質問に対して「CDを聴く」とか、「CDの伴奏と一緒に歌う」とかという電子機器を使用をするという答えが30%以上ありました。また、朝の会の前に流していくなど、まず耳から入れようという意見も多かったです。これは興味を持ってもらうということに対してはとても良いことだと思います。「動きを付けて覚えさせる」という意見もありました。

現代においては、新しい歌を覚えるということについて言えば、生まれた時から音が氾濫した世界に生きている学生や子供にとっては、ある意味では耳が良くなっているかもしれませんが、知識から学んで正確に歌うわけではないのでそれを良しとするか、悪いとするのかは判断が難しい所です。学生と音楽を通じて話してみようと思うことは「感性はとてもゆたかにある」と思いました。

2

ふるさと（文部省唱歌 作詞：高野辰之・作曲：岡野貞一・編曲：古谷和子、大海由佳、長谷川恭子）

ひらいたひらいた（わらべうた 編曲：古谷和子、大海由佳、長谷川恭子）

茶摘み（文部省唱歌 編曲：古谷和子、大海由佳、長谷川恭子）

※編曲者は、ステップ1、ステップ2、ステップ3の順

大海由佳(帝京科学大学)

古谷和子(東京経営短期大学)

長谷川恭子(秋草学園短期大学)

小学校の全科教員は、音楽科の授業も担当するため、ピアノ演奏の技術は必須である。しかし近年、教員養成校の学生は、ピアノ演奏経験をせずに入学者「ピアノ初心者」が多く、ピアノ演奏経験のブランクが長い学生も合わせ、ピアノ演奏困難者は半数を超えると思われる。

このような小学校教諭養成校の学生の状況により、小学校の現場では音楽科授業の歌の伴奏に教科書準拠のCDなどを使用する教員が少なくない。CDの音源による伴奏は正確で、間違いにより演奏が中断されることもない。しかしこの指導法は「児童の自由な表現による音楽」ではなく、児童がCDに合わせて歌う「CDが主導する音楽」になるといえる。生の演奏ではないという意味では、〈先生が自分たちのために伴奏をしてくれる〉という温かみを感じ、児童が教員と共に豊かな表現を楽しむことは困難である。

自治体によっては教員採用試験でピアノの実技を課す場合がある。歌唱共通教材が主な課題曲だが、教員養成課程で扱うテキストに掲載されている伴奏譜は難しいものも多く、ピアノ演奏未経験の学生は準備が容易ではない。このような学生のためには、究極的な簡易伴奏譜が必要となる。また、ピアノ演奏経験者である学生には、楽曲の曲想を生かした、音楽表現がさらに豊かになる楽譜を示したい。

このことから、発表者は、小学校教員養成課程のピアノの授業を担当する中で学生のニーズとして挙げた下記に対応する歌唱共通教材の伴奏編曲を行った。

①学生のレベルにあった多様な伴奏のバリエーション②各レベルのどの伴奏でも美しい響きであること③弾きやすい指使い④各レベルの右手は共通して歌のメロディである⑤自習ができるオリジナリティな練習方法の提示

本発表では、これらをふまえて伴奏編曲と映像制作に至った経緯と方法について説明を行い、作成した伴奏譜により、声楽とピアノによる演奏を行う。

演奏曲目（作詞者・作曲者・編曲者の順）

《こどものための連弾曲集》より「めだかのがっこう」（中田喜直 作・編曲）

演奏曲目（作詞者・作曲者・編曲者の順）

《こどものための連弾曲集》より「ゆりかごの歌」（草川信 作曲・中田喜直 編曲）

演奏曲目（作詞者・作曲者・編曲者の順）

《四手連弾のための組曲 日本の四季》より「5、初秋から秋へ」（中田喜直 作曲）

演奏者名(所属) 原久美子（東京福祉大学短期大学部）

演奏者名(所属) 四家昌博（仙台白百合女子大学）

要旨

本発表は、保育者および小学校教諭養成校でのピアノ指導における連弾の有用性を再考し、連弾の学習に適した楽曲について考察するものである。

既にいくつかの先行研究で報告されているように、連弾の学習には「音をよく聴く」、「互いの音を聴く」といった音楽的能力を向上させるだけでなく、「他者と共感する」、「相手に配慮する」といった保育者や教員としての素養を身につけさせる効果がある。こうした効果に加え、連弾の学習は「協同的な学び」でもあることから、学生のモチベーションに良い影響を与える傾向もある。

連弾の学習で取り上げられる楽曲について先行研究を振り返ると、クラシック、ポップス、映画音楽など様々なジャンルが用いられていた。近年、養成校では音楽に抵抗感を抱くピアノ初学者の学生が少なくないということを検討すると、連弾の課題として取り上げる楽曲は、学生が一度は耳にしたことがあるような親しみやすい楽曲であることが望ましいと考えられる。

そこで、本発表では現在も幼稚園、小学校等で広く歌われている「唱歌」、「童謡」、「子どもの歌」に着目し、これらの歌の旋律が用いられている連弾曲として、中田喜直が編曲、作曲した《こどもの連弾曲集》より「めだかのがっこう」、「ゆりかごのうた（草川信 作曲）」、さらに《日本の四季》より「5、初秋から秋へ」を取り上げる。《日本の四季》の「5、初秋から秋へ」には「小さい秋みつけた」、「もみじ（岡野貞一 作曲）」、「まっかな秋（小林秀雄 作曲）」など秋をテーマとした三つの歌の旋律が曲中に登場する。

このような連弾曲は良く知られた歌の旋律が素材となっているため、学生が親しみをもって取り組むことができるのではないかと推察している。

4

ロベルト・シューマン作曲《子供の情景》作品 15 より抜粋

大村 新（貞静学園短期大学）

ロマン派ピアノ音楽の傑作《子供の情景》作品 15（1838）。後に《ユーゲント・アルバム》作品 68（1848）などの児童教育のためのピアノ作品を生み出すシューマンが、初めて「子供」をテーマにした作品であり、それは 19 世紀におけるペスタロッチやフレーベルらの活躍との興味深い並行現象と捉えることができると思います。終曲（詩人は語る）に象徴される《子供の情景》の深遠な表現は「子供という存在」に向けられたシューマンの視線そのものであり、19 世紀ピアノ音楽の最も神秘的な一頁でもあると私は考えます。

このように《子供の情景》は後の教育用作品とは異なり、技術的にも内容的にも子供が弾くことを想定しておらず、その魅力を十分に引き出すことは、ピアニストでも難しい作品です。

しかしあえてこの作品を取り上げたいのは、今回指摘する技術面の工夫によって、音を変更したり、減らしたりすることなく、弾き易くすることが可能な作品の例として最適だからです。

シューマンのピアノ作品が難しいとされる理由の一つには、大譜表の上段と下段を、そのまま右手と左手で弾くと「非合理的な手の交差」が生じることが挙げられます。今回はこの点に着目し、左右の手の再配分を行い、「合理的な指使いとペダリングを発見する」という基本的なアプローチについて考察します。

この考察によって《子供の情景》に限らず、ブルグミュラーから一歩進むことができる学生に、クラシックの名曲を手が届くものにし、その豊かな内容を味わえるような「技術」を与えること、さらにはバイエルレベルの学生にも役立つ、少しでも容易にピアノを弾くためのヒントを見つけること、この 2 つの目標に迫ってみたいと思います。

（発表者による参考演奏動画：シューマン：《子供の情景》https://youtu.be/qD4_cL642pE）

5

演奏曲目（作詞者・作曲者・編曲者の順）

「海四章」より 馬車（三好達治・中田喜直）

演奏曲目（作詞者・作曲者・編曲者の順）

木兎（三好達治・中田喜直）

演奏者名(所属) 三沢大樹（常葉大学・関東地区学会）

演奏者名(所属) 新海 節（藤女子大学・北海道地区学会）

要旨

筆者は今年度より、幼稚園教諭、小学校教諭、中学校及び高等学校教諭（音楽）の全ての校種に亘り、教員免許状取得に必修となる教科教育法等の授業を担当している。ここで、我が国の学校教育に於ける歌唱指導の中の、特に子どもの歌や日本歌曲といった「日本語の歌」がどの段階で扱われるのかを改めて俯瞰してみると、全ての段階に於いて実施されていることが分かる（高等学校では芸術科「音楽」は選択科目であり、全員に学習されるものではない）。その一方で、小学校低学年でわらべうた（或いはわらべうた調の楽曲）が共通教材として取り扱われている等の例外を除き、多くの場合は経験則的な難易度の差は見られるものの、学年や校種間の接続を見捉えた教材楽曲の配列等の意図的な工夫は感じられない。我が国に於ける近代学校教育の黎明期から音楽（科）教育の中心を担ってきた「日本語の歌」の学習・指導がより発展してゆくために、今後は校種間を一貫するカリキュラムツリーの作成等が必要であろう。

また、現行検定教科書を確認すると、中学校では共通教材7曲を中心に、高等学校では諸外国の芸術歌曲と共に数多くの日本語による独唱歌曲が掲載されている。そして該当頁に「(詩の表す) 情景を思い浮かべながら (歌唱する)」等といった学習目標が提示されていることが多い。詩が意味する内容は詩人の思いの一つであり、また作曲家にとっても作曲上の重要な手がかりとなる要素の一つである。故に、詩の情景を的確に思い浮かべ、歌唱表現に反映させることのできる能力が重要とされているのであろう。一方で、詩人が作品に込めた内在的な言葉や語のリズム、詩の行や連の切れ目と作曲上のフレーズの違い(作曲家による変更)等を理解するためには、情景に思いを巡らせることだけでは不十分である。これらの理解には、詩を実際に朗読することが有用であり、筆者も実践している。芸術性歌曲を教材として取り扱う際には、詩と音楽の関係を掌握しておくことは指導者にとって必要不可欠であり、母国語であれば尚更に研究を深めたいところである。しかし、現在一般に入手することが可能な一般書物や学術的資料には明らかな誤りも散見される。一次資料の整理が、今後早急に必要であろう。今回取り上げた2歌曲に関しても幾つかの誤った資料が確認されるが、紙面の都合上別の機会に言及する。